

同窓生シリーズ

⑨ 自然の生命に
ふれたいと教り

松尾敏男



日本画家 松尾敏男氏

旧17回生(昭和19年卒業)
大正15年 長崎市生まれ
昭和46年 日本美術院同人に推挙される
昭和53年 日本美術院評議員に任命される
昭和57年 日本美術院監事に任命される
代表作 第一回山種美術館賞展で「翔」
後秀賞受賞
昭和47年 「海峡」で芸術選奨新人賞受賞
昭和54年 「サルナート想」で日本芸術院
賞受賞
花鳥画を得意とし、特に白牡丹は有名。

日本画の重鎮でいらっ
しやる松尾敏男氏に春の
院展でお忙しいなか、朝
陽会館においていただき
いろいろお話をうかがい
ました。

ユニークな六中
当時学校の記念日など
には徳川夢声さんをよん
で漫談を聞いたたり、少女
バレエ団の公演をするな
し戦争の影響が出てきま

日本画との出会い
五年のとき、肋膜を患

って好きだった体操を断
念し絵の道に切りかえま
したが、私にとってこれ
はそんなに苦しいことで
はありませんでした。最
初に好きだったのは絵だ
つたし、運動とは別の新
しい楽しみをみつけたよ
うな感じでした。療養
中に堅山南風先生の絵に
出会いました。他の人は
その頃より高校から大学
へという道を選んだが、
私の場合、尊敬する南風
先生のものとへ弟子入りし
絵の道を自分から求めて
いこうと決心しました。
そして横山大観との出会
い。直接言葉を交わすこ
とはなくとも、その存在
後ろ姿を自分の目で実際
に見ることができたこと
に大きな運命みたいなも
のを感じます。
人間は人生に於いて努
力しているうちに何かき
っかけをつかんだり、右
に行くべきところ

たま左に行ってしまった
も必ずどこかでまた右に
旋回して自分の進むべき
道に到達できるものだと
思います。
生命を感じていたい
人間生きようとするこ
とと、生きるということ
は違う。絵、小説、音楽
などにたずさわっている
人は自分の作品を通して
生きようとする証みたい
なものを具現化していく、
これが世の中に対する一
つの啓示だと思えます。
私が今まで花鳥画を主と
して自然の生物をテーマ
としてきたのは、少しま
もいから生命というも
のを感じていたい。そし
てそれを描いていると自
然と話ができる。相手は
沈黙しているけれど、そ
の沈黙の言葉が聞こえて
くるのがとても楽しいで
すね。
また絵そのものは抵抗

の仕事、一種のレジスタ
ンスだと思えます。絵描
きが興味をもつのは、豊
かなものに対してではあ
りません。
真の貧しさの意味は
私はインドが好きでよ
く旅行します。
「貧しき人」という題で
描いた絵を自選展の会場
でご覧になった方が、題
が気に入らないと文句を
いわれたそうです。イン
ドの中で一番収入の少な
い貧しい人々をモデルに
群像を描きました。本当
の貧しさとはどこにある
のかという意味で題をつ
けました。
*
日光輪王寺の鳴き竜を
堅山南風先生と共に、三
年間をかけて描かれた松
尾先生。一枚の絵の中に
は描く人の色々な思いが
込められていることに改
めて感動しました。

ど、非常にユニークな学校
でした。
徳川夢声さ
んのときは一
時間の子定で
話をお願いし
たところが、大変気持ち
のついてしまわれ、約二
時間近くも一人で漫談を
続けられました。
勉強さえてできればいい
という校風でなく先生方
も勉強以外のものを何か
学生に求めているので、
思い出深い六中生活を送
れたのだと思います。
日本画との出会い
五年のとき、肋膜を患

たまたま通りかかった英
語の入江先生が「俳優に
なつて何が悪い」とかば
つてくれたということだ
す。彼はこの先生に大変
感謝していると述懐して
いたと聞いています。戦
争にどんだんのめり込ん
でいくなかでも一種の大
らかさ、夢を追うロマン
のある学校でした。